

# Think you know Yotsukaido?

## 「四街道知ってるか？」

YOCCA の副会長、デヴォンさんが四街道の気になるところを取材するこのコーナー。今回デヴォンさんが気になったのは、小料理屋の前にたたずむ「たぬき」・・・？！

今回、「四街道知ってるか？」でとりあげる話題は、このシリーズ第1回の「四街道十字路」周辺に私を引きもどすことになる。ガソリンスタンドのそばの樹齢数百年の古木の立っていた四街道十字路。あの木は2013年の台風で倒されなくなってしまったが、今ではその場所に小さな芽が育ち始めている。今回の話題はすこし今どきの話になるのだが、ひまわりという小料理屋の前にいる、洋服を着た“十字路”(“女装した”という意味があります)のたぬきの噂…。

私が最初にその噂を耳にしたのは友人からだった。“前を通る機会があったら、見てみて。そのたぬきはね、着物を着ていることもあれば、洋服を着ていることもあるのだけど、何か月かごとに、着替えるのよ。”友人の言う通りだった。そして、それからはそこを通るたびにタヌキを見て、様子を知るのが私の楽しみになった。

私は今号の記事のために、調査に行ってみることにした。最初は1人で、ちょっとだけびくびくしつつひまわりの営業日に訪ねてみたのだが、歓迎されて、最後にはマスターとオーナー、そして常連さんと何時間も話し込んだ。おかみさんでありオーナーである一戸さんは、気持ちよく、もう1度この話を伺うために私と会うことを了承してくださった。そこで2回目は、YOCCA のカメラ担当者である白石さんとひまわりを訪ね、以下のようなことを教えていただいた。

一戸さんは香取出身だそうだが、結婚後東京に移り住んだ。そしてしばらくして、四街道に居を構える。ひまわりを経営して15年だそうだ。4年ほど前に、1度店を閉めることを考えた。当時のマスターがそろそろやめようかと考えていて、彼女は1人で何もかもするのは難しいと思ったからだった。しかし、運命の導きだったのか、店の常連の1人が警視庁を定年退職したばかりで、マスターの仕事を引き継ごうかと申し出てくれたのだ。そして、彼はその仕事を引き受けると同時に、警察を辞めるときにプレゼントされた記念品と一緒に連れてきたのだ。それが、本物のたぬきのはく製だった。つまり、新しいマスターが仕事を始めたとき、ひまわりにマスコットも登場したわけだ。

最初は昔ながらの麦わらの雨傘(雨合羽)を付けていたが、“まるで、時代劇を見ているみたいで、可愛くなかったのよ。埃をかぶって、汚れてしまって。そこで、私は、このたぬきを女の子にしてみようと思ったの。女の子ならもっとかわいい恰好ができるでしょ。”

おかみさんは当初、それほど頻繁に着るものを代えるつもりはなかったようだ。“でも、1度、ハロウィンのコスチュームを着せた時に、前を通りかかったお母さんと子どもたちが写真を撮っていったことが

あったの。そして‘ハロウィンが終わったら、次はどんな衣装を着せるのですか?’と聞かれて、...‘そのことを考えてなかったわ’と思ったの。”

衣装のいくつかは、サンタクロースの衣装のように、彼女が編んだものも含めて、手作りだ。“でもものすごく手間暇を取られるので、この頃では買ってくることもあるの。”

話が、あちこちに飛び広がっていく中で、私たちは四街道についても話をした。長年住んでいるので、さまざまな夏祭りの話や、私の友人と彼女のお孫さんが同じ学校に通っていたことだとか、お互いに共通の話題がたくさんあり、隣近所のことについて話が通じた。このことは、私に、四街道が本当に十字路の街であるということ思い出させた。様々な道が交差し集まる町。どこから来たのか謎深いたぬきは、東京で働いていた男性によって、香取生まれの女性の経営する居酒屋に持ち込まれて、客にほほえみかけている。そして海のはるかかなたの向こう側からやってきた男がそのことについてインタビューしている...

一戸さんにお礼を行って、帰る準備をしながら、どうしても、あのたぬきが本当は“彼”なのか“彼女”なのか確かめたいという欲求を抑えられなくなった。結果は...：どちらの明らかなヒントも得られなかった。しかし今、彼女は青いアジサイ色のドレスに身を包み、来る夏に備えてサングラスをかけ、新しい自分に大変満足し、幸せそうに見えた。